

山西省 以後

——『山西省』から見た宮柀二——

蒲池 由之

人間誰しも一生のうちには生涯の転機をなすような事件に何度か遭うものであるが、それは、あるいはその人の性格から必然的に導き出されたものとして、すなわち、その人の本然の性格を契機として現われてくることもあるし、あるいはその人の性格のいかんにかかわらず、すなわち、外的強制として、一種の天災のように与えられることもある。しかし、それが外部から与えられたものにせよ、

その人の内部から導き出されたものにせよ、その事件にいかに対処してゆくか、その事件をいかに乗りこえてゆくかということ、その人自身の性格に基づいて決定せられるほかはないし、その事件を通じてその人が現われる、その人が真にその人になってゆくといえよ。ところで、その人本然の性格から導き出された事件は、その人の本質的な性格をいよいよ補強し固める働きをする。その人自身がつかみ取っていたものが、その人にとって本質的なものであったことを確認させる。いわば直線的にその人は真のその人になってゆく。それに対して、外的強制として与えられた事件は、その異質性によってその人の本質的なものに動搖を与える。もしその人がその

動搖を感じ取るだけの敏感さを有しながら、自己の本質をこわすことがなければ、異質なものを取り入れることにより、その人自身も気づかなかつた未現の本質が引き出されてくるだろう。その人は異質のものを媒介として真のその人になってゆく。したがってそこに現われてくるものは複雑で変化に富みながらそれゆえにいつそその人らしいといえよう。

宮柀二にとってもおそらく生涯の転機をなすような事件がいくつもあったであろうし、その一つとして山西省における戦闘に従ったこと（注一）を挙げても異論はあるまい。柀二が自分の一生の為事として短歌を選んだこと、北原白秋に師事したこと（注二）会社を退いて短歌一本になったこと（注三）等はすべて彼の本質と深いつながりを持っていて、たとえ長い迂回があつたにせよ必然のなりゆきだといえようが、山西省での戦いはこれらの事件と違って、彼の本質とは何のかかわりもなく、強大な国家権力から無理じいに押しつけられた一種の災難のようなものであって、彼はいやおうなしにこの矛盾に満ちた異質の世界を全力をもって切りぬけなければなら

ない羽目におちいったのである。しかもその切りぬけ方が、いかにも格二らしい、彼の本質に即したものであったために、山西省の経験は、単に山西省の時期のみでなく、それ以降の格二の歩みにとって重大な意義を持つことになったのである。

宮柁二は山西省での四年間にわたる、国家から与えられた災厄的運命を、ただ受動的に迎えたのではなく、そこに、積極的に生きようという自己の決意を加え、自己の責任においてこの一時期を生きようとした。つまり山西省の世界が格二にとって全く異質の世界であったこと、その異質の世界を自己の責任において、しかも自己の本質に即して生きようとした点に山西省の時期が格二にとって重大な意義を持つゆえんがある。

山西省の時期を宮柁二がどのように生きようとしたか、その基本的態度は次の一首に尽きている。

おそらくは知らるるなけむ**一兵の生**きの有様をまつぶさに**遂げ**む(こころざし)(106)(注4)

武勲赫赫たる將軍や陣頭指揮の將校としてでなく、一兵としての生をつぶさに遂げることが、まことに平凡なこと、それが平凡であるだけに成就することははなはだ困難だと思ふが、この至難にして苦難に満ちた平凡事をあえて選んだところに、いかにも格二らしい身の処し方がある。以下しばらく「一兵の生」という角度から、歌集『山西省』について考えてゆこう。

「一兵の生」を遂げるといふ基本的態度から『山西省』の作品は次のような特徴を持ってきている。(1)任務遂行の忠実さ、

こころばへ寂しくなりて私語けり悔あらぬ兵を遂げむと思ふと

(98)

あさかげに銃ひらめかせし四圍を**発見**せしより願ふなし(15)

必ず死なむこころを**誌**したる手紙書き了へぬ**元奮**もなし(130)

(2)空疎な感情表白をさけて行動の具体に就いている。

五度六度つづけざま敵弾が岩をうちしときわがが**軽機関銃**鳴りそむ(105)

弾丸がわれに集りありと知りしときひれ伏してかくる近視眼鏡を(125)

突然に闇より打ち来し敵の弾丸石段右角に火花を散らす(135)

麦の**秀**を射ち難ぎて弾丸の来るがゆえ汗ながしつ我等**匍**ひゆく(141)

(3)戦闘のつらさを非常なものとせず、肉体の消耗、疲労といった日常的な肉体労働に類するものとして受け取っている。

わが顔を流るる汗は山の上の氷らむ土にしたたりて沁む(104)

天幕を襲のごとくに**窟**となすと越後の兵が賞められてをり(133)

胡麻畑を踏みゆく若き友が言ふあはれ白胡麻は内地にて**価高**しと(134)

こういった作品群を通じて「一兵の生」を遂げようという意図が、大体意図どおりに成し遂げられたことが伺い知られる。そうして、当時のまじめな青年にとって自分の生を価値あらしめる生き方は、ここに伺われるように、自己に与えられた運命を自己の責任に

おいて受け取り、非人間的条件下で、精一杯人間らしく生きようと努力すること以外にはなかったといえよう。しかし私は、無条件にこの生き方を賛美ばかりしてもおれない。というのは、この生き方の根底には大きな矛盾が横たわり、その矛盾に体ごとぶつかって、これを解きほぐすのでなくては、「一兵の生」が真に普遍的価値を持つことができないからである。その矛盾とは何か、それはどこから生じたか。それは一兵の生を超えた大きなもの、すなわち当時の日本国家が持っていた歪みから生じた。その矛盾というのは、一兵が人間的であればあるほど、結果として侵略戦争をおしすすめるための有効な道具たる非人間性を發揮する。逆にいえば、結果として非人間的であることによってしか、一兵として人間的であり得ないという矛盾である。『山西省』においてこの矛盾は次のような特徴として作品に現われてきている。

(4) 戦闘描写の苛烈さとして。

殆どが鬼籍となりし小隊に呼びかくるごとく感状下る (11)

9) 馬家吃染鞍部に狂ひうばたまの船に墜ちゆきし馬五、六頭 (1

338)

胸元に銃剣うけし捕虜二人青深谷に姿を呑まる (144)

この種の歌は挙げればきりがないほどであって『山西省』一巻の中心をなし、その価値を高からしめているのがこの種の歌であることはいうまでもない。

(5) 「敵」に対する憎悪感の少なさとして。

鷄をいすくめ抱へ密偵の丈の低きが捕はれ来りぬ (111)

父も母もその子の誑も帰り来よ燈影差して神位も舞はむぞ (1

20)

浮びくる中共論理の言葉辭・春耕・犠牲・統一累進稅 (157)

(6) 満足感の少なさ、或いは悔しさとして。

抛処なくこころ寂しむ寒き日に赤き折鶴唼入にあり (124)

見返れば風に揺れつつ吾木香ある葉は折れて空を刺したり (147)

耳を切りシヴァン・ゴッホを思ひ孤独を思ひ戦争と個人をおも

ひて眠らず (152)

(7) 大陸の荒涼として。

鳥ひとつ影にも翔ばず畏荒れたり連なみ遠き陝西省の山 (114)

修羅すぎて青さ極まる夏夕空御國にあらねば凄涼に満つ (116)

晋察冀の秋深みつつ鷄頭の色づき凄き村々の様 (137)

大陸の荒涼というのを矛盾の現われとして挙げたのはおかしいよう

であるが、ここに描かれた風景は作者の内部にある違和感の象徴と

して存在しているのであって、作者の感情とかわりのない一個の

物として存在しているのではない。

x

x

ここで今度は角度を変えて『山西省』を後記から考えてゆく。

『山西省』の「後記」は一九四六年四月に、「續後記」は一九四九年二月に書かれている。作品と後記との間には二年五月乃至九年六月の年月がはさまっており、日本の降伏がはさまっている。だから後記の書かれた時には、すでに中国における戦争の意味が顛倒してい

た——というよりは、戦争中顛倒していた意味がようやく正常な形にひきもとされたというべきであろう。作者は山西省の時代および『山西省』の作品について十分な反省を加えつつ後記を書いているのである。「本集収載の作品のごとき、作者にとって多少の記録的の意味こそあれ、文学として幾千の普遍力を有するや疑ふ。出来得れば、多くは讀まざることを希ふ、部数を限定する所以である。」（『續後記』）ということばもそこから生じてくるのである。しかしながら、山西省の時代を後記を書く時にふりかえって、なおかつ自信と自負とを持って作者の言いうることは、自分が「一兵の生きの有機をまつぶさに遂げ」たということであろう。それなくしては『山西省』の公刊すら行なわれなかつたであろう。

また一方後記を書いた時からふりかえって、作者は一個人の存在の小ささ、それをとりまく超個人的な力の大きさを改めて感じたと思われる。それがはっきり伺われるのは、「『續後記』のはじめに見える『大陸の自然』の敵しさを書いたところと『中共軍の抵抗』を述べたところとである。大陸の自然と大陸の人間と、いずれも作者にとって全く異質の存在であり、想像を絶する巨大な力をひめ、理解を拒む敵しさをもって作者の前に立ちはだかつた。「一兵の生」はこれらのものによって、常に無価値なものに転落する危険にさらされる。『山西省』の後記の文章から感じられる緊張感に満ちた美しさはこれと無関係ではあるまい。

「中国ははつきりとした将来の自信の上になつて、犠牲を見守り見送つてゐた。

麻の葉が、びっしよりと青を漉へて生ひ立つてゐた。それは恐怖をそそるばかりであつた。さうした記憶が何の關聯もなく目の前に

現れたりした。日本軍はひしひしと包囲をちぢめて来る力の前に東奔西走、又、南船北馬して戦はねばならなかつた。私は心を引緊めて立派な兵隊でありたいと思つたり、そして戦いの中に死なうと思つたりした。」（『續後記』）（傍点引用者）という文と、毛沢東が一九三九年イギリス人記者に答えた「山西省にはいつた日本の軍隊は、現在は、戦略上では、八路軍やその他の中国の軍隊に四方から包圍されています。われわれは、日本軍が、こんど華北において、もっとも頑強な抵抗に出あうであろうことを断言することができます。日本軍が山西で横行しようとするれば、かならず前代未聞の困難に遭遇するでしょう。」（『イギリス人記者、バートラムとの談話』）ということばとは、まるでトランプの一枚の札の裏表のよう

にびたりと符号するではないか。

「一兵の生」がこういう個を超えた巨大な存在によつて無にひつしいものに転落させられることは「一兵の生」に全人間をかけて戦っている個人にとっては耐えがたいことである。たとえいかにささやかな一個人の存在にせよ、そのささやかな生のなかに、巨大なものと同等の価値の存することを信じなければ、人間は自己の歩みを否定しなければならなくなる。また、そういうささやかなものの中に存する価値を証することが短歌の持つ重要な機能である。『山西省』では、それがあくまで「一兵」の個に即したものととして、個の具体的な行動、集団におぼれない個の感情、心理として現わされている。『山西省』の特徴として前述のほかに次の三つをあげることができる。(8) 現実把握の強さとして。

鞍傷に朝の青蠅を集らせて砲架の馬の口の草液(113)

秋霧を赤く裂きつつ敵手榴彈落ちつづく中にわれは死ぬべし(1

22)

突然に闇より打ち来し敵の弾丸石段右角に火花を散らす (13

5)

(9) 抒情の美しさ。

傷負はず我は睡たしいささかの鳳仙花赤く静まり咲けり (11

7)

頂の見通し据えし銃眼に雲母のごとき一日の空や (119)

薄花河の水の響の空を打ち秋は来にけり大石の影 (132)

(10) 心理的陰影

たたかひの最中静もる時ありて庭鳥啼けりおそろしく寂し (1

01)

帯剣の手入をなしつつ血の曇落ちねと告ぐべきことにもあらず

(129)

ひまあれば由なきことも惚ぶぞと銃剣術の防具をまとふ (13

0)

(9) にあげた抒情の美しさは柘二作品の本質をなしており、『群鷄』以来『多く夜の歌』に至るまで一貫して変らない基本線であって、

山西省におけるすさまじい戦闘が比類のない緊迫感のなかに詩としての凜然たる美しさを保っているのは、柘二の抒情の質の高さによるものである。(4) にあげた、戦闘描写の苛烈さと、(9) 抒情の美しさ、とは『山西省』をささえる二つの極をなしている。この両極が

性格的に全く対照的であり、両極の斥きあう力が強烈であればあるだけ、その強烈さが『山西省』の緊迫した美しさを生み出す力となってくる。たゞこの両極が『山西省』においては作者自身によって充分意識的にはとらえられず方法的自覚をもって両極がおしたて

られなかつたらみがある。そのために(4) (7) のような面が「一兵」を一兵の特殊な世界から、より広やかな共通の場に導き出す働きを、本来ならばするはずであるのに、かえって、一兵を異質の世界から隔てさせ、純粹ではあるがやや狭い個の世界に閉じこもらせる働きをしている。そのために「一兵の生」は、自ら限定した範圍内において、強い現実把握力を持ち、複雑な心理のひだを帯び、美しい抒情をかなでることができたのであるが、作品の調和を破るほど酷しく凄まじく一兵の生が描き出されなかつた。一兵の生が一兵の生ではなくなるほど、はげしく異質の世界に迫ることによって、一兵の生の普遍性が立証されるのであるが、そこまで至らないで終わった。たとえば「敵」の描き方について見てみよう。そこに感ぜられるのは(5) で指摘したように、意外なほどの憎悪感の少なさである。

出没する敵百姓をのぞみつつ水を溜め濠を掘り静けき日々や (108)

石家庄をしきり南下する匪隊あり青便衣にして騎隊を混ゆと (109)

浮びくる中共論理の言葉群・春耕・犠牲・統一累進税 (15

7)

歩哨を粗疎して過ぎしかの隊に百の婦女隊員をりしを傳へ來 (159)

(159)

という歌から、憎悪も、また逆に共感・同情の類をも感じとることができない。これらの歌から感じるのは、作者が相手をまるで自分と無関係な物体、石ころか何かを見るように、感情を動かさず、理解を放棄して眺めている姿である。ここには彼我の対立がকাশし出

十緊張感がないし、理解を超えたものを理解しようとするためのいらだちもない。

鶏をいすくめ抱へ密偵の丈の低きが捕はれ来りぬ (111)

目の下につらなる部落の幾つかが我に就き敵に就き遂に謀りき (160)

これらの歌にしても、そういう相手を、何か自分の理解しがたい行動をしている動物を見るようにじっと見つめている感じである。

ひきよせて寄り添ふごとく刺ししかば声も立てなくくづをれて伏す (139)

大部隊を目の前にして灰黝む埤濕の中に追ひこまば如何に (11)

落ち方の素赤き月の射す山をこよひ襲はむ生くる者残さじ (136)

このように歌っても、そこには任務に忠実な一兵があるだけで、個人的な憎悪というものは感ぜられない。しかしここまでくると、作者の感情が、ヒューマニズムの入口まで来ている感じで、はたして次のような歌がある。

自爆せし敵のむくろの若かるを哀れみつつは振り返り見す (121)

俯伏して斯に果てしは衣に誌しづれも西安洛陽の兵 (139)

これらは敵味方を越えて、戦いに死んだ者に対するいたまじさ、同情の念を現わしている。ただ、その気持ちヒューマニズムと呼ぶには余りに淡い段階に止まってしまった。後記に描き出されたほどには敵の美しさが現われていない。これは「敵」に対する追いつめ

方が足らず、憎しみが薄く、相手に対して判断を停止して傍観しているような態度が、敵と自分との本質的な対立面をばやかしてしまい、結局は相手に対する充分な理解をさまたげたのではないか。作者はもっと「敵」を憎み、「敵」をやっつけ、頑強に自己主張して「敵」を拒むべきであった。そういう徹底性が、憎しみを通じて、次第に、憎むだけでは済まない相手の本質を明らかにしてくれ、明らかになってきた相手の上に反照させて映し出すことによって、それと戦っている味方、その中の一兵としての作者がどのような性格を持っているかが明瞭に把握されるようになるであろう。そういう基本的対立を意識的にとらえることなく、

父も母もその子の、匪も帰り來よ燈影差して袖位も舞はむぞ (120) (傍点引用者)

という、民族融和的な、宣撫的な思想が、戦略とか政略とかを離れて、作者個人の気持ちとして、まじめに歌われているという点に、

『山西省』が大きな限界を持っていることを認めざるをえない。

笑ひなく言に頼り來る少年の齡釋くて青衣を仰合はず (11)

はるばると君送り來し折鶴を支那女童の赤き掌に載す (124)

こういう歌の底にある人間の善意を疑うことはできない。その善意はそれ自体としては尊いものだ。しかしこういうった個人のささやかな善意は当時進行しつつあった大きな国家悪の中に組みこまれて行ったときに、虚しい存在でこがなく、時には個人の善意とは全くうらはらなものを導き出すおそれさえあった。これらの善意は場合によってはヒューマニズムへ至る道をふたぐ役割をしたかもしれな

い。

『山西省』に次のような一首がある。

響の類あまた並べし家ぬちに運び遅れたる女ぞひそむ (11)

4)

武田泰淳とか堀田善衛とか開高健とか小説家A氏B氏C氏なら、こ
ういった素材から戦争の本質をえぐり出す問題を引き出し、適当に
構成して一篇の小説を組み立てたかもしれない。ところが短歌はあ
くまでも作者の一回きりの特殊な経験に執し、その時点での感動を
歌う以外の方法がとれない。修正も再構成もきかない特殊な詩型で
ある。ために一度その時点で詠まれなかったものは、永久に作品化さ
れないままでおわってしまう。後記の書かれた時の気持ちをもって、
作品に変更を加えることはすでに不可能である。そうすると山西
省のような特殊な時代は、戦後になってふりかえってみた時、他の
どの時代にもまして、反省、悔恨、決意を作者に与えるであ
らう。自分のあの時期の生き方はあれでよかったのか。自分は自分
なりの生き方を選んで精一杯に生きてきた。あれでよかったのだ。
いや、しかしあもしたかった、こゝもすべきであった。ああしな
ければよかった。こうしないでよかったという反省、また悔
恨。それはやがて、今後の自分の生き方についての一つの決意とな
ってくる。『山西省』以後の歌集においてそれを見てみよう。

その当時において權威のあったもの、確信して疑わなかったもの
が、時代が変わって戦後になると、根底からゆるぎ出したのを見る
につけて、時流に乗るもの、衆をたのむもの、權威によるものをた

やすく信じまいとする。かくて、反省は懐疑を生み出す。そう
して、悔恨は過去の生き方に対する否定を伴うから、現実に対処
する場合にも、拒否に傾く心的傾向を有する。更に、決意は懐
疑と拒否とによって、自己限定の決意として現われる。自己の信
じうる狭い範囲に自己を限り、そこで自己本来のものだけを歌っ
てゆこうとする態度である。そのため山西省で個人を超える大きな
ものに触れた経験は直接的には爾後の生活の中で生かされず、逆に
作用して、かえって、狭い世界にとじこまる要因になる。本来なら
連帯、解放、自己拡充の契機となるべき山西省の経験が
逆に作用して、孤独、抑制、自己限定をもたらしした点に宮柎
二の資質、性向の問題があるのであるが、あくまで個の特殊に執し
つつ、確信を持って自己の世界を歌っているうちに、狭いように思
われた個の世界が、いつのまにか普通のひろやかな世界につながっ
ていることに気がつく。それが『小紺珠』から『晩夏』をへて『日
本挽歌』に至って宮柎二が打ち立てた世界である。そこにおいて、
一旦は受容を拒まれた形の山西省での経験が、長い時間をかけ、作
者の個性に即した方法に従って再び生きかえって、作者の世界を
広め深め豊かにする作用をしていることに気がつく。それは安易な
形で受け入れられなかっただけに常識的な形での影響を与えること
を免れて、より深いところにおいて、柎二の個性をゆきさぶり、柎二
の資質の発展をうながしているといえよう。

雨多く降り来る夜半の蟲が音と沁河々谷の瀉聲といづれ (17)

9)

この夕べ壙へ難くあり山西のむらむらとして 鬚ち来もよ景色

うちかえす摩天の山のつらなりに墜ちいゆきは魂消えし鳥

(201)

来船をかって飢りしものゝ容便衣監にして齒の消き兵

(20

4) 愴然と夜の部屋にをり北支那に見たりし河原の砂をおもひて

(229) 以上『小紺珠』)

ここでは山西省の体験を延長した、具体的に事実即した回想が行なわれる。そうして『山西省』の再確認・修正がここで行なわれる。「一兵の生」を拒むものとして立ちはだかった大陸の自然の厳しさと、中共軍の兵士とは、ここでは完全に肯定的な表現で描き出される。さきに指摘した、「敵」に対する判断停止的な表現がふっきれて「齒の消き兵」がくつきりと肯定的に描き出される。山西省の自然はいよいよ厳しく一兵を拒絶している。これらの作品は『山西省』に比べて、より孤独で、よりいたましい響きを帯びている。ここにおいて「一兵の生」はほとんど否定し尽されようとしている。「當時に遡って正直を告白すれば之は作品では無い。」(『山西省』「後記」ということはが記されたのは、ちょうどこの時期である。「作品で無い」というのは小論に即して言いかえると、「一兵の生」が十分に遂げられなかった。一兵の生にそういう巨大なものにつりあう価値がない。」ということになろう。

長江の河岸に迫る軍のうち崔少年はをりやをらすや(282)

たたかひを知りたるゆゑに待つ末来たとへば若草の香のごとく

来よ(300)

おもかげに頭ちくる君ら硝煙の中に死にけり夜のダリア黒し

(309)

わが世界狭しとおもひ夜半にをり次第に猛りくる憤怒あり(309) (以上『晩夏』)

ほとんど否定されたかに見えた「一兵の生」にも一個の絶対的な価値があること、その価値は巨大な機構や自然の持つている価値に劣らぬこと、それを無視されてはたまらないという確信が次第に固まってきて、感情が自己閉塞的な方向から反転して、外部に対して攻撃的にのびてくるさまが、引用歌の三、四首めから伺われる。それは一首めのように他者の生の肯定を通じての自己肯定ともなり、二首めのようなびやかな発想ともなつて現われてくる。それは一度否定をくぐってきただけに揺がぬ確信的肯定となっている。

群れる蝸蝸の卵に春日さす生れたければ生れてみよ(327) 罪なく悪なきものを追ひ追ひて新しき兵器の殺戮しゆく(328)

見下しの棚田の面に浮苗は片寄りにけり日本の平和(328)

新聞配達として働きき戦争に兵たりき今宵四十歳の矮き影あり

(346)

銃を負ひ背囊を負ひたちまちに苦しわが幻影あゆみ去る(352)

(以上『日本挽歌』)

この時期になつても作者は前述したく抑制々々自己限定々々という基本姿勢をくずしていない。しかもその姿勢から生まれた引用第四、五首めの歌が、個の特殊に即しながら、背後に深いひろがりを持って、人間の普遍を描き出していることに気がつく。ここに至つて、「一兵の生」がその全き意味において遂げられたことを知るのである。普遍に至りえたからこそ引用歌の始め三首のような視野の広い歌も個性的な作品として成功を取めるに至つたのである。

さてここで、宮柁二が山西省において遂げようとした「一兵の生」とは何かということを変更して考えてみよう。これを戦場という特殊な場から広く一般的な日常生活の場に移して考えれば、これは、平凡な生活人の日常生活における生ということになる。平凡な生活人の日常生活の持っている普遍的な価値を信ずること、その平凡な日常の生が現代の短歌を生み出す場であることを確信すること、そこから宮柁二のいう「生の証明」という主張（注5）が出てくるのであろう。山西省において志した「一兵の生を遂げ」ることが、『日本挽歌』に至って、戦場という特殊な場から日常の場に解き放つて達成せられたことが、それ以降の宮柁二の作歌活動を支える大きな自信となっているのではないか。『日本挽歌』の作品一般に見られるひろやかな境地は、さきに引いた戦争に関連のある五首とけつして無関係ではないし、『山西省』的なものを軸として宮柁二の作品を見た時にも、『日本挽歌』の作品はその到達点を示していると思う。そうして『日本挽歌』までに到達したものをふまえた上で、次の歌集『多く夜の歌』では更に新たな歩みを踏み出したように思う。それは異質なものを充分に摂取し、自己補充を遂げた上で、更に自己本来のものにたちかえりながら——第一歌集『群鶏』に最も柁二的な本質が原質的な形で出ている——年齢を加えることによつて得た自在な境地と表現力とを駆使してゆくという形になってくるようにも思うが、今にわかに論断しがたい。ともあれ、『山西省』的なものが柁二の作品世界を広くも深くも徹しくも複雑にもしていること、その影響はけつして単純な形では現われず、かえつて逆作用的な働きを通じて行なわれたために、柁二作品の本質の展開に有効な作用をしたこと、そういう影響の受け方自体に宮柁二その人の

資質があること、『山西省』的なものの受容は一応「日本挽歌」で完全し、今はそれを顧慮する必要のない地点を歩んでいること等を指摘することができると思う（注6）。そこに『山西省』の作品自体の価値とともに『山西省』が宮柁二の作歌道程において果した意義を認めるものである。

（一九六二、一〇、二八）

注1 新潮文庫『宮柁二自選歌集』の年譜によれば、一九三九年八月―一九四三年一〇月出征、一九三九年一月―一九四三年九月戦地にあつた。

2 同書年譜によれば、一九三三年四月、北原白秋に初めて会い師事している。

3 歌誌『コスモス』一九六〇年一二月号、通信コスモスの消息によれば、一九六〇年一〇月九日付富士製鉄退社。

4 以下引用はすべて創元社発行『定本宮柁二全歌集』（一九五六年一二月刊）による。歌の下の（ ）内数字は同書における引用歌の所在ページである。

5 一九五三年二月（三月号に当る）歌誌『コスモス』創刊に際して「みづからの生の証明を」と題した創刊のことばを書いている。

6 小論と反対に『山西省』の体験の意味を認めない発言として例えば『コスモス』一九六一年七月号共同研究「戦後短歌史」Ⅱ「戦後派の登場」（その二）における岡井隆、山崎一郎氏の発言を紹介しておく。

岡井 僕は佐藤にしても、宮にしても、美に対する固定観念

といつてもいいくらいはつきりした信頼があると思ひます。

(略)「山西省」にしても、宮の戦後の活動から読み直して、戦場体験を云々するけれども、僕は余り賛成しない。

山崎 その点は、僕も同感だな。近藤にしてもそうだと思ひが、少くとも宮の場合は、戦争を一つのメカニズムとして捉えろといつたような方向では受けとめていない。そういう意味では、戦争体験というものが作家としての思想を支える一つの大きなファクターになつてゐるかどうかは疑問ですわね。

(熊本県立済々壘高等学校教諭)